Ⅰ．はじめに

2021 年秋、京都大学白眉センターとモンゴル科学アカデミー考古学研究所は発掘調査合意書を交わし、今後 4 年間の予定でモンゴル国に所在する匈奴期遺跡の調査を実施することで合意した。

調査対象とする遺跡は、モンゴル国中央北部のセレンゲ川流域地域の遺跡を希望した。その理由としては、調査企画者はロシア連邦ブリヤート共和国に所在する匈奴遺跡との比較の観点から、モンゴル国の北部地域は重要であると考えていたためである。モンゴル国では 2000 年頃から数多くの匈奴期の遺跡を対象とした発掘調査が実施されているが、現在のところロシア連邦ブリヤート共和国に向かって北流するセレンゲ川本流付近での発掘調査事例は少ない状況にある。セレンゲ川とその支流が集まる同地域は、乾燥地が広がるという草原の国モンゴルというイメージの中にあって、その他地域とはまた異なる面が調査によって見えてくるのではないかという点を期待した。

2022 年度の調査遺跡については、検討の結果、セレンゲ県（アイマク）ヨロー郡（ソム）(Сэлэнгэ аймаг, Ерөө сум) に所在するオラーン・ボラク遺跡 (Улаан булаг) を発掘調査することとなった (図 1, 2)。

2022 年夏は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行に伴う行動の規制が徐々になくなってきている時期であった。発掘調査期間と調査体制は、下記のとおりである [1]。

■調査期間

2022 年 7 月 17 日～ 7 月 30 日 (14 日間)

■調査体制

＜日本側＞

責任者：大谷育恵 (京都大学白眉センター)

＜モンゴル側＞

責任者：L. イシツェレン Л. Ишцэрэн
(モンゴル科学アカデミー考古学研究所)

調査員：G. ガンバートル Г. Галдан
(モンゴル科学アカデミー考古学研究所)

調査員：B. ボヤン - オルシフ Б. Буян-Орших
(モンゴル科学アカデミー考古学研究所)

作業員：モンゴル教育大学ほか学生 8 人
うち学生 1 名は B. ミシェールト

運転手：3 名

コック：2 名

(1 所属は調査当時。

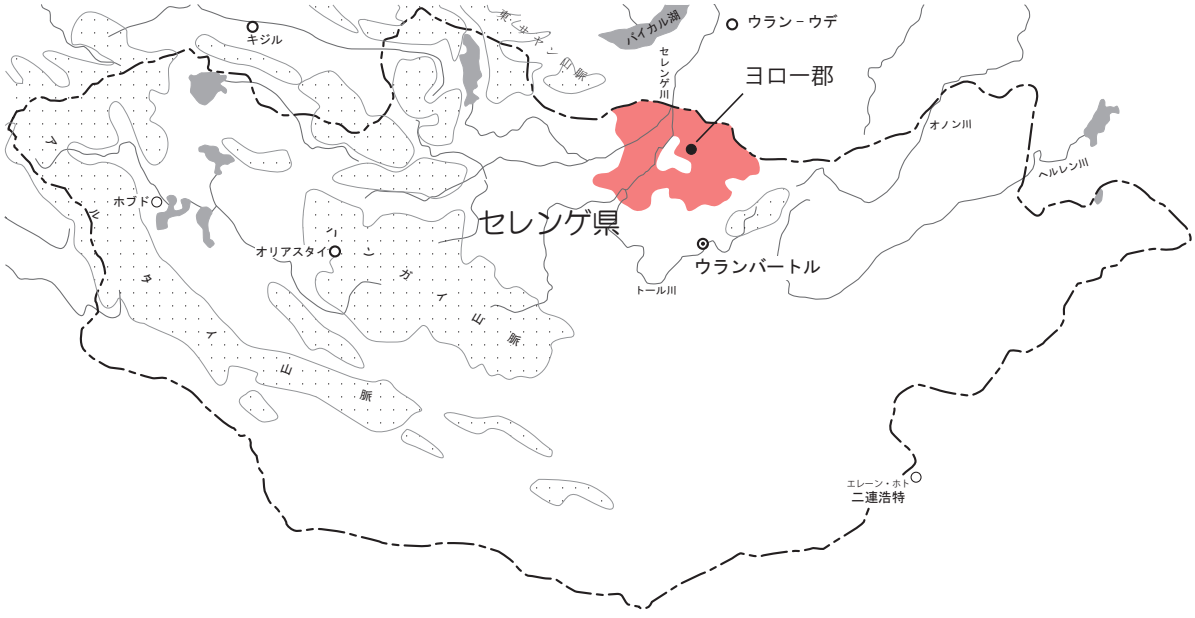


図 1　セレンゲ県ヨロー郡の位置

Ⅱ．位置と環境

1. 遺跡の位置

オラーン・ボラク遺跡 (Улаан булаг) は、行政区分の上で、セレンゲ県ヨロー郡 (Сэлэнгэ аймаг, Ерөө сум) に所在する遺跡である。ヨロー郡の中心地からは、東北方向に直線距離にして約 20km 離れた場所にある（図 2）。

オラーン・ボラク遺跡は、チョロート山脈から流れ出すオラーン・ボラク川の名から名付けられた遺跡であり、その川の最上流には「赤い泉」を意味する泉が湧き出している。チョロート山脈の北側はロシア連邦ブリヤート共和国であり、山脈北面の河川はチコイ川 (р. Чикой) に流れ込むのに対して、南側はヨロー川水系に流れ込み、オルホン川、セレンゲ川となって蒙露国境を越え、バイカル湖に向かって北流する（図 4）。

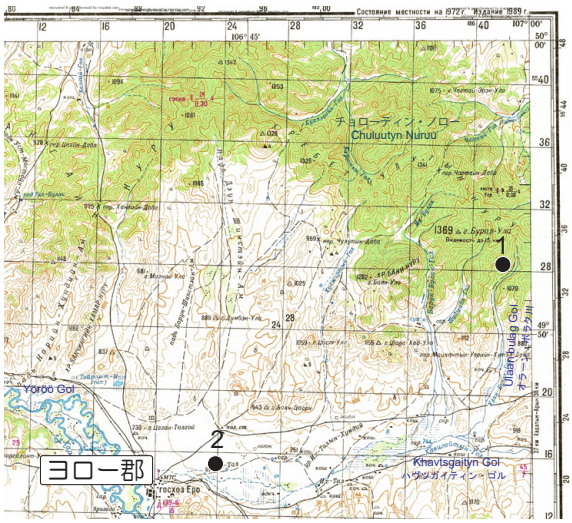
2. 調査の歴史

オラーン・ボラク遺跡は、Ts. オドバータルが率いたモンゴル国立博物館の踏査によって、2019 年に登録された遺跡である [Монголын үндэсний музей 2019]。モンゴル国の遺跡を悉皆調査した報告書としては、『モンゴルに所在する歴史・文化不可動遺産』が各県単位で刊行されているが（図 3-1）、セレンゲ県分冊は 2011 年刊行のため、同書には登場しない遺跡である。博物館が実施した踏査報告書（図 3-2）には、1912 年を嚆矢とするセレンゲ県全域で実施された考古学踏査の歴史がまとめられているが [Монголын үндэсний музей 2019: 5-7]、これまでヨロー郡域は調査が手薄な地域であった [同 :6]。

しかしながら、匈奴時代の遺跡に限定して図 4 のとおりやや広域にみてみると、蒙露国境を越えたブリヤート共和国側では数多くの墓地や城址が報告されている。中でも、ツァラム墓地、オルゴイトン墓地、イリモヴァヤ・パジ墓地は匈奴貴族墓とされる凸字形の大型墓を含む墓地であり、匈奴研究においては重要な遺跡が集まっている地域の 1 つである。

このような状況がある中で、同じセレンゲ川流域の国境を越えたモンゴル側には匈奴期遺跡がないということは考えにくく、実際に衛星画像からは匈奴時代のものと推定されるハンドガイト城址の存在が確認できた。したがって、調査対象地域をヨロー川流域とし、調査初年度にあたる 2022 年は墓地、2023 年度からは城址と両種の匈奴時代の遺跡を発掘調査する計画を立てた。

なお、2019 年の踏査報告書では、南に向かって開口するオラーン・ボラク川河谷地にある遺跡をオ



1. オラーン・ボラク遺跡 (2022 年度調査)
2. ハンドガイト城址 (2023, 2024 年度調査)

図 2　ヨロー郡中心地と発掘調査した遺跡の位置

1.『モンゴルに所在する歴史・文化不可動遺産』(2011 年)　2. オラーン・ボラク地域の踏査報告書 (2019 年)

図 3　セレンゲ県域に関連する調査報告書

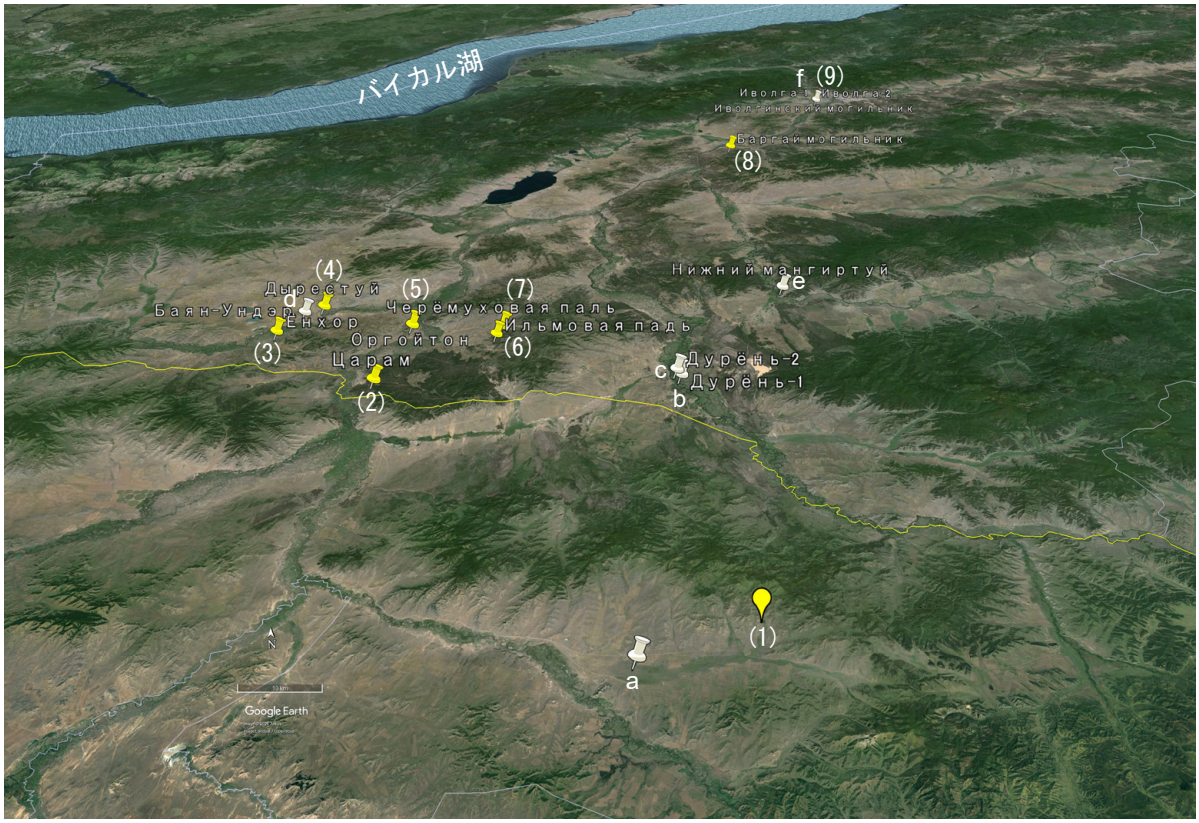
ラーン・ボラクⅠ、Ⅱ、Ⅲとして登録して報告しているので、説明を付け加えておきたい。3つの墓地は、最も山側のⅢ墓地から最も平野に近いⅠ墓地まで東南方向にほぼ一直線上に並んでいるが、ⅠとⅡの間は約0.6km、ⅡとⅢの間は約1.4km離れており、同一名称の遺跡名を与えられてはいるものの、別の墓地と考えた方が良いと考える(1。発掘調査したのはⅢ墓地であり、以下Ⅲ墓地の調査について報告する。

(1 Ⅰ墓地には、内側に石が詰まっていない直径4~7mの環状石積のある墓が15基あり、匈奴期と判断していると思われる。Ⅱ墓地には、内側に石の詰まった直径3mの円形石積をもつ墓が5基あり、モンゴル時代としている。また、Ⅰについては尾根を越えた別の斜面にあり、3つの墓地の関係性は希薄にみえる。

参考・引用文献：

Монголын үндэсний музей, 2019, *Сэлэнгэ аймгийн Ерөө сумын Улаанбулаг хэмээх газарт хийсэн археологийн хайгуул судалгааны ажлын тайлан*, УБ. [モンゴル国立博物館『セレンゲ県(アイマク)ヨロー郡(ソム)のオラーンボラクと呼ばれる地で行った考古学踏査報告』]

Соёлын өвийн төв, 2011, *Монгол нутаг дахь түүх, соёлын үл хөдлөх дурсгал, VI.Сэлэнгэ аймаг*, Улаанбаатар. [Center of Cultural Heritage, *Historical and cultural immovable properties in Mongolia, volume VI. Selenge province*, Ulaanbaatar]



墓地

1. オラーン・ボラク墓地　Улаан булаг
2. ツァラム墓地　Царам
3. ヨンホル墓地　Ёнхор
4. ディレストゥイ墓地　Дырестуй
5. オルゴイトン墓地　Оргойтон
6. イリモヴァヤ・パジ墓地　Ильмовая падь
8. チェリョムホヴァヤ・パジ墓地　Черёмуховая падь
9. バルガイ墓地　Баргай
10. イヴォルガ墓地　Иволга

城址

a. ハンドガイト城址　Хандгайт
b. ドゥリョーヌィⅠ城址　Дурёны-I
c. ドゥリョーヌィⅡ城址　Дурёны-II
d. バヤン - ウンデル城址　Баян-Ундэр
e. ニジニー・マンギルトゥイ　Нижний мангиртуй
f. イヴォルガ城址　Иволга

図4　バイカル湖に流入するセレンゲ川とその支流に所在する代表的な匈奴遺跡

Ⅲ．発掘調査

1. 遺跡全体と発掘調査した墓について

発掘調査したオラーン・ボラクⅢ墓地は、現地で「モドト（木のある所）」と呼ばれている小高い場所にある。2019年の踏査報告書に登録されている遺跡のGPS値は、北緯49° 49’28.9”、東経106° 57’54.9” である。

2019年の踏査時に墓の分布図が作成されているが、発掘調査と並行して再度測量を行い、分布図を作り直した（**図5**）。地表で確認できる石積み遺構を元に判断すると(1、遺跡には異なる3つの時期の墓があり、大きく分けて3か所に集まっているようにみえる。

第1群　第1群は、西側の緩やかな尾根上にある。14基の板石墓(2が集まっている。

第2群　第2群は、第1群からみて東側の別の尾根にある。14基の墓があり、2基は板石墓、12基は中世の円形積石墓とみられる。

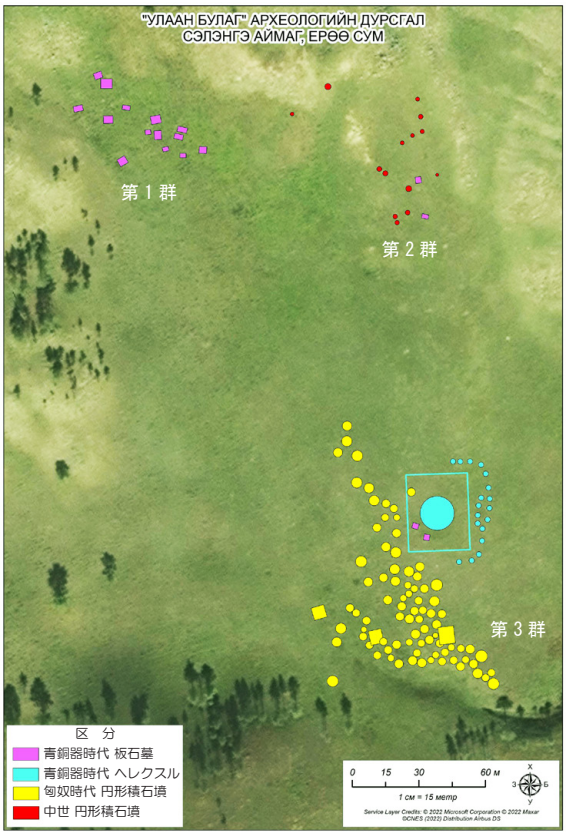
第3群　第3群は、第2群と同じ東側の尾根の南端裾部にある。青銅器時代のヘレクスル(3と匈奴期の墓が集まった最大の一群である（**図6**）。

ヘレクスルは尾根上にあり、約40m × 40mの石囲いを持ち、東辺側には小型の石堆が並んでいる。石囲いの中央には円形の積石墳があり、その南西側には方形の石組2つが確認できた。匈奴墓はヘレクスル南西側の緩やかな裾部に86基が分布している。今回の調査では、その中の3基を発掘調査した（**図7**）。

(1 モンゴルにおいては、墓の外表施設である円形の積石において、内側に石が詰まって円形であるものをモンゴル時代（中世）とみなし、内側に石がなく環状のものを匈奴時代のものとみなすことが多い。時代判断はこの基準に基づいている。

(2 板石墓（дөрвөлжин булш）とは板石を組んで作った方形の墓で、モンゴル高原やザバイカルに多く分布する墓の一種である。

(3 ヘレクスル（Хиргисүүр（ヒルギスール））は「キルギス人の墓」を意味する語に由来し、モンゴルやブリヤート共和国に分布する青銅器時代の積石墳の一種である。



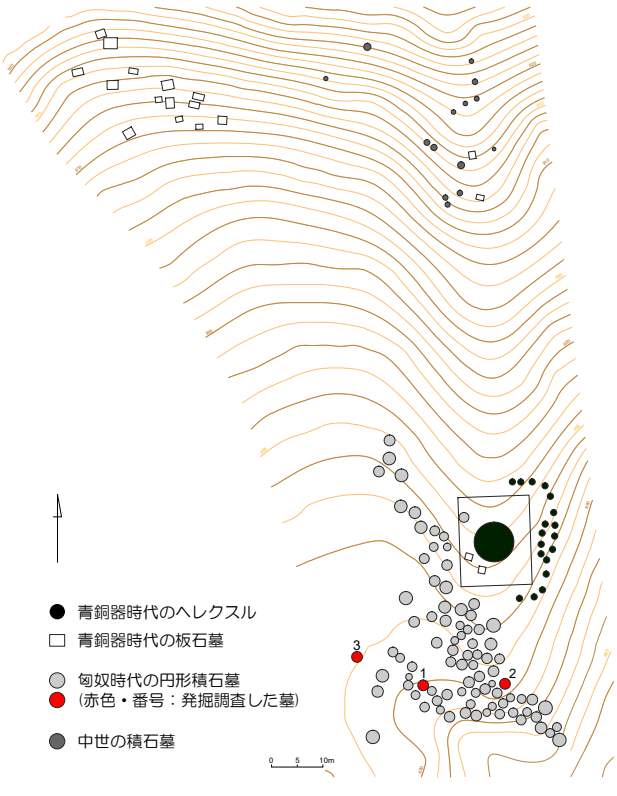


図5　オラーン・ボラク遺跡の遺構分布図

図 6　オラーン・ボラク墓地 第 3 群全景（写真天が北）

図 7　調査した 3 基の墓　（南東から）

図 8　調査した 3 基の墓　（図 7 の遺跡北にある山の上から撮影）

写真左上あたりの標高の低いところに樹木が生い茂った緑の列が見えるが、これはオラーン・ボラク川の両岸に生えたヤナギなどの樹木からなる列。遺跡の東側にはオラーン・ボラク川の河谷が走っており、遺跡の西側は図 9 のとおり高地で丘陵が続いている (図 2 も参照)。

図 9　北東から遺跡と遺跡の南西を望む

2. 1号墓の調査

2-1. 調査の過程

地表上で直径約 4m の環状の積石が地表上に認められたため、東西 6m ×南北 6.5m の調査区を設定した。除草と表土除去のため、調査区内を約 10cm ほど掘り下げた（**図 10, 11-1**）。この段階で、環状積石の西側の石の横で土器片が確認された（**図 10 記載箇所 , 22**）。また、環状の積石がはっきりとしたことで、東南角の石群は隣接する別の墓のものと考えるようになった。墓坑の土層断面は A － A' の面を記録したが（**図 12**）、環状積石内側の表土とした落ち込みの堆積土の厚さは 10~15cm あり、この段階では墓壙の落ち込みの輪郭はまだ確認できなかった。積石は保存する方針であったため、ひとまず南北ベルトの西側をさらに 40cm ほど掘り下げた（**図 11-2**）。H=888.100m で中央部に石が確認され始めたため一度記録をとり、南北ベルトを除去して墓壙内を掘り下げた（**図 11-3~4, 13**）。H=887.700m 付近で中央部に比較的石が多く確認され、骨鏃 1 点（**図 24-3**）も出土した（**図 12 上 , 14**

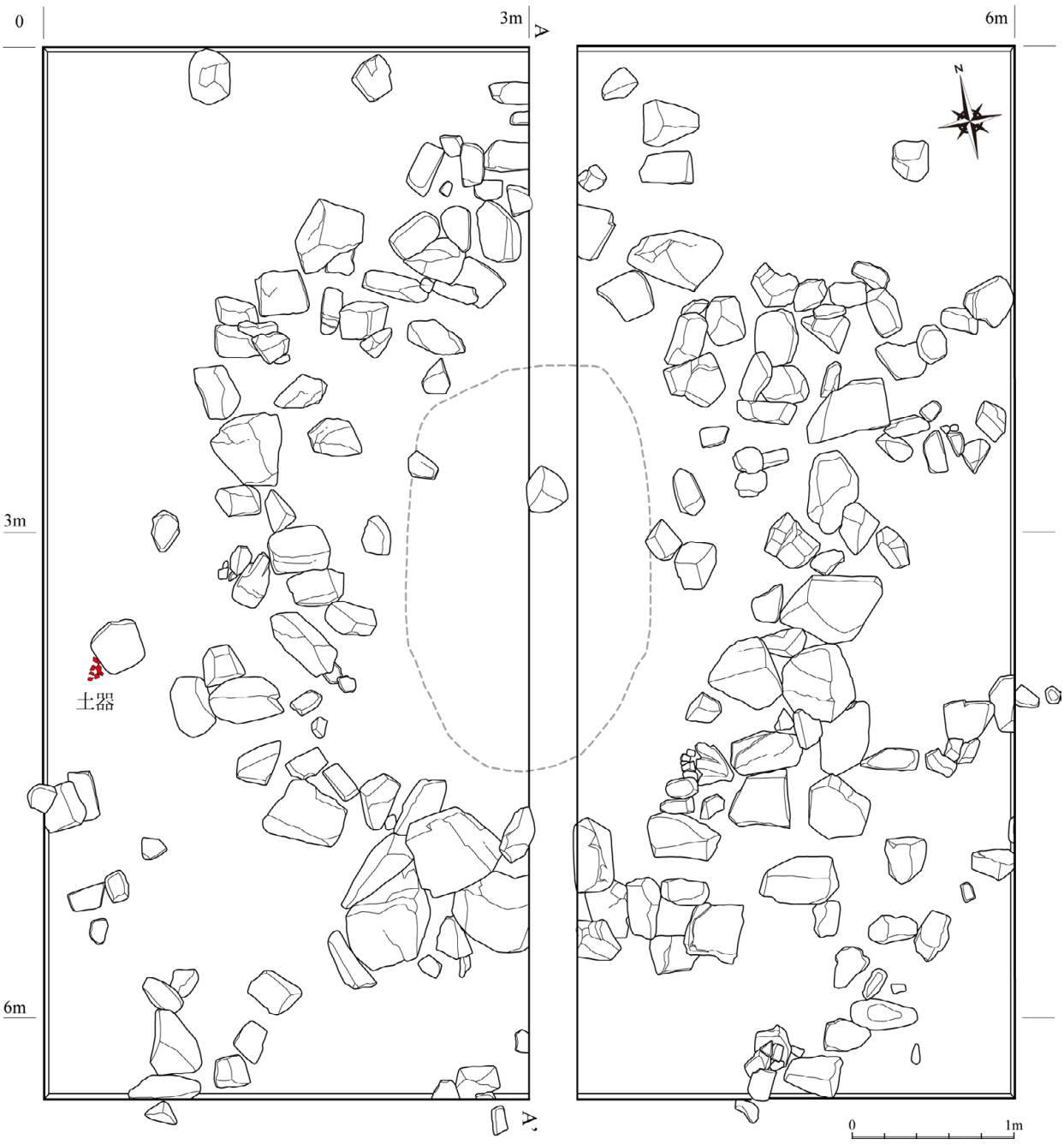


図 10　オラーン・ボラク 1 号墓　表土除去後

1. 表土除去後

2. 墓壙半裁、西側掘り下げ開始

3. 墓壙半裁、東西掘り下げ開始

4. ベルト除去後

5. 墓壙掘り下げ2回目（西側半分掘り下げ）

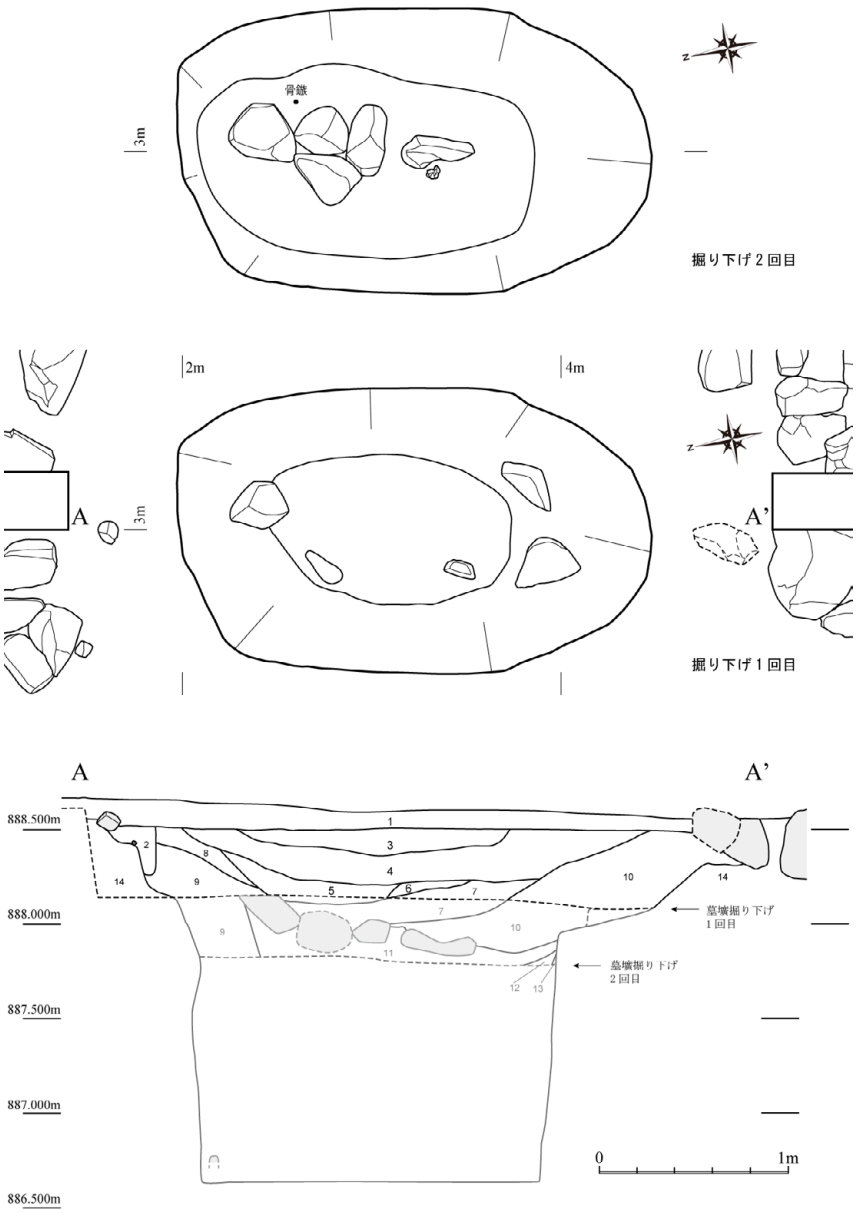
6. 墓壙掘り下げ2回目（石検出面状況）

図11　オラーン・ボラク1号墓　掘り下げ過程

7. 石を除去後、再度掘り下げ（再び石を検出）

8. 石槨の石を検出

（図 11 つづき）　オラーン・ボラク 1 号墓　掘り下げ過程



1. 10YR 3/2 黒褐　砂質土。表土。
2. 〃　1 よりしまりなし。木の根が入り、攪乱土。
3. 10YR 5/3 にぶい黄褐　砂質土。礫少量。
4. 10YR 4/2 灰黄褐　砂質土。礫少量で均質な土。
5. 10YR 3/2 黒褐　砂質土。礫が稀な均質な土。
6. 10YR 5/3 にぶい黄褐　ブロック状の明るい土色の土。3mm 程度の礫を 7% 程度含む。
7. 10YR 3/3 暗褐　砂質土。礫少量で均質な土。
8. 10YR 5/2 灰黄褐　砂質土。9 より黒味が強い。
9. 10YR 5/3 にぶい黄褐　砂質土。1~3mm 程度の礫を 3% 程度含む。
10. 〃　10 の方が 9 より黄味が強い。
11. 10YR 4/3 にぶい黄褐　砂質土。3mm の礫 1% 含む。
12. 10YR 4/3 褐　砂質土。
13. 10YR 8/3 浅黄橙　乾くと乳白色に近く、良くしまる。1~3mm の礫を 1% 含む。

図 12
1 号墓墓坑 平・断面図

右)。石は H=887.700m 以降確認されなくなり、また墓壙の垂直な掘り込みが明瞭になっていった。

再び石が確認され始めたのは H=876.800m 付近で、墓壙の壁よりやや内側に石の側面を立てて並べたような列が見え始めた (図 11-8, 15)。墓壙長軸方向に壁に沿って並べたような石が見られる反面、乱雑に存在する印象を受ける石も存在したことから、盗掘による攪乱を受けていると考えられた。ひとまず全ての石を露出させていったが、北と南の短壁に沿って据えられた石は見られなかった。乱雑に積み重なった石の上や間で腐朽した木材の一部が確認でき、また骨鏃 2 点も発見された (図 16,17)。乱雑に積み重なっているようにみえる石を除去して内部を掘り下げると、石棺内側に沿って長方形の

図 13　南北ベルト A-A’ 土層断面 (図 11-2, 3 段階)　(西から)

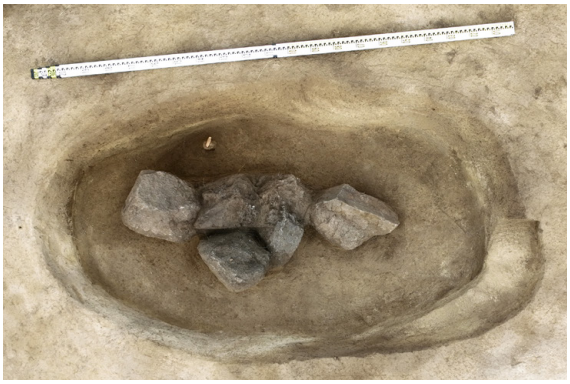


図 14　墓壙掘り下げ 2 回目 (図 11-5, 6 段階)　(写真天が東)

図 15　石棺検出

図 16　石棺検出後清掃

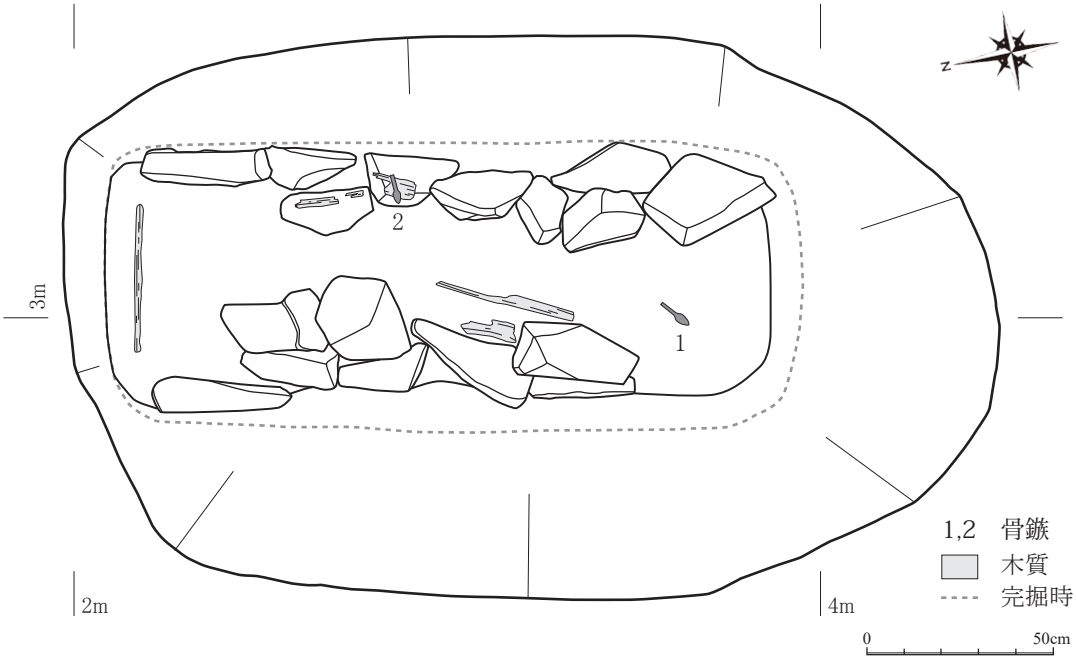


図 17　石棺検出時の墓壙内

図 18　石棺内

図 19　石棺内部掘り下げ（底面で木質検出）

図 20　石棺内完掘

木棺痕跡が現れた（**図 17**）。木棺の大きさは 1.75m × 0.45m であったと推定される。木棺内の被葬者人骨の出土状況をみると、上半身は大きく乱れていたが、両脚脛骨（ひこつ）以下は原位置を保っており、若年男性 (10 代後半)[4] が北頭位で伸展葬されていたものとみられる（**図 18**）。人骨を取り上げて清掃をかけると、木棺底板と思われる木質痕が明瞭となったが、腐朽のため長軸方向に木目が走っていること以外はつかめなかった（**図 19**）。石棺内を完掘後、調査を終了した（**図 20，21**）。

2-2. 出土遺物

1 号墓からは土器、骨角製品、石器が出土した。ただし、石棺検出以降に出土した遺物は骨鏃 3 点のみである。

■土器

土器はいずれも小片で、そのほとんどが表土除去中に出土した。表土除去時に積石の間で出土した一部は接合可能なものもあった（**図 10, 22, 23-1, 2**）。**図 23-1** と **図 23-2** の 2 片は同一個体と思われる。内外面ともに赤褐色を呈し、胎土は均質な泥質粘土で、硬質に焼けている。外面は良くなでられているが、内面には指押さえの痕が残り、その上に上から下方向へ削ったハケ目がある。**図 23-4** も胎土と焼成は上記 2 点と類似するもので、同じく表土除去時に積石南西部分で出土した。内外面とも良くなでられており、外面に浅い刻線が 1 本認められる。**図 23-3** は、墓壙掘り下げ 1 回目に掘り下げた墓壙東側埋土から出土した。内外面ともに茶褐色で、泥質粘土を用い、良く焼けているが脆い。壺の口縁とみられる。

■骨角製品

骨製品はいずれも骨鏃で、3 種 4 点。

1 種目は鏃身断面が菱形になるように稜があり、矢柄に納まる茎部の上下面が末端に行くほど薄く削られているもの。**図 24-1, 2** が該当し、共に角製で、石棺清掃時に出土した (図 17)[5]。鏃身の平面形は丸

(4 人骨の鑑定結果については、考察編Ⅱ章の岡崎・ミシェールト報告を参照。

(5 図 17-1 が図 24-1、図 17-2 が図 24-2 (枝番同一)。

図 21　墓壙内完掘

図 22　表土除去時出土土器検出状況（西から）

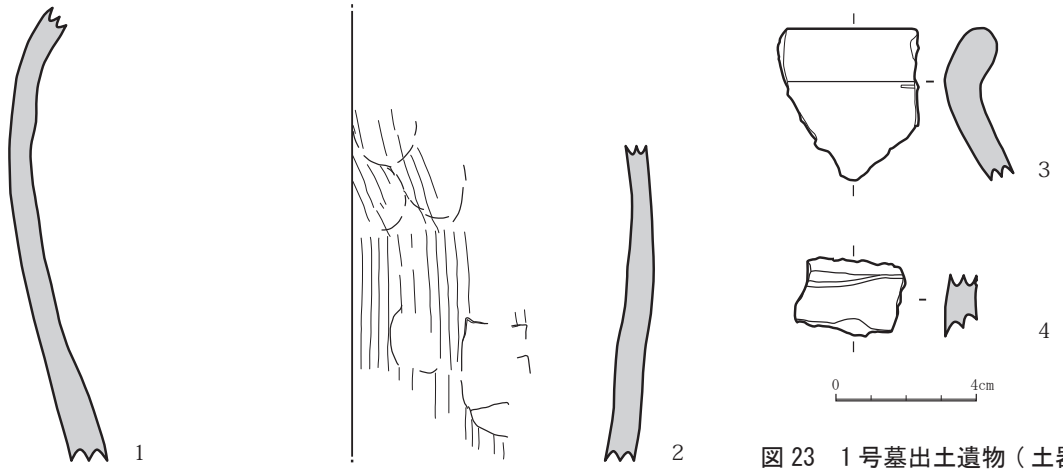


図 23　1 号墓出土遺物（土器）

みのある菱形様であるが、側面から見ると、刃があるのは最大幅がある位置までで、それ以降の収束してゆく部分は丸く仕上げられている。図 24-1：長さ 9.6cm、鏃身最大幅 2.0cm、最大厚 1.1cm。図 24-2：長さ 8.2cm、鏃身最大幅 1.8cm、最大厚 0.9cm。

2 種目は鏃身断面が凸レンズ状で、茎部は欠損のため不明であるが、おそらく矢柄の内に入るもの。**図 24-3** が該当し、墓壙掘り下げ 2 回目の面で出土した (図 12, 14 右)。骨製の鏃身平面形は柳葉形で、側面からみると最大の位置まで刃があり、収束部分には削られた面があるようにみえる。残存長 5.1cm、鏃身最大幅 1.7cm、最大厚 0.8cm。

3 種目は矢柄を挟むことができるように茎部が割られたもの。**図 24-4** が該当し、長さ 10.1cm、鏃身最大幅 0.9cm。上下面に稜があるものの、対称の位置にあるわけではないので、鏃身断面は平行四辺形のような形をしている。

■石器

石器は剥片と砥石と思われる石の 2 点である。

剥片は墓壙掘り下げ 1 回目の埋土から出土した。黒曜石で、片面の下辺に沿って調整がある。長さ約 2.6cm（**図 24-5**）。

砥石とみられる砂岩の石は、幅広の二面は共に平滑であるが、断面四面は整った形をしていない。最大長 5.9cm、厚さ 0.9cm（**図 24-6**）。

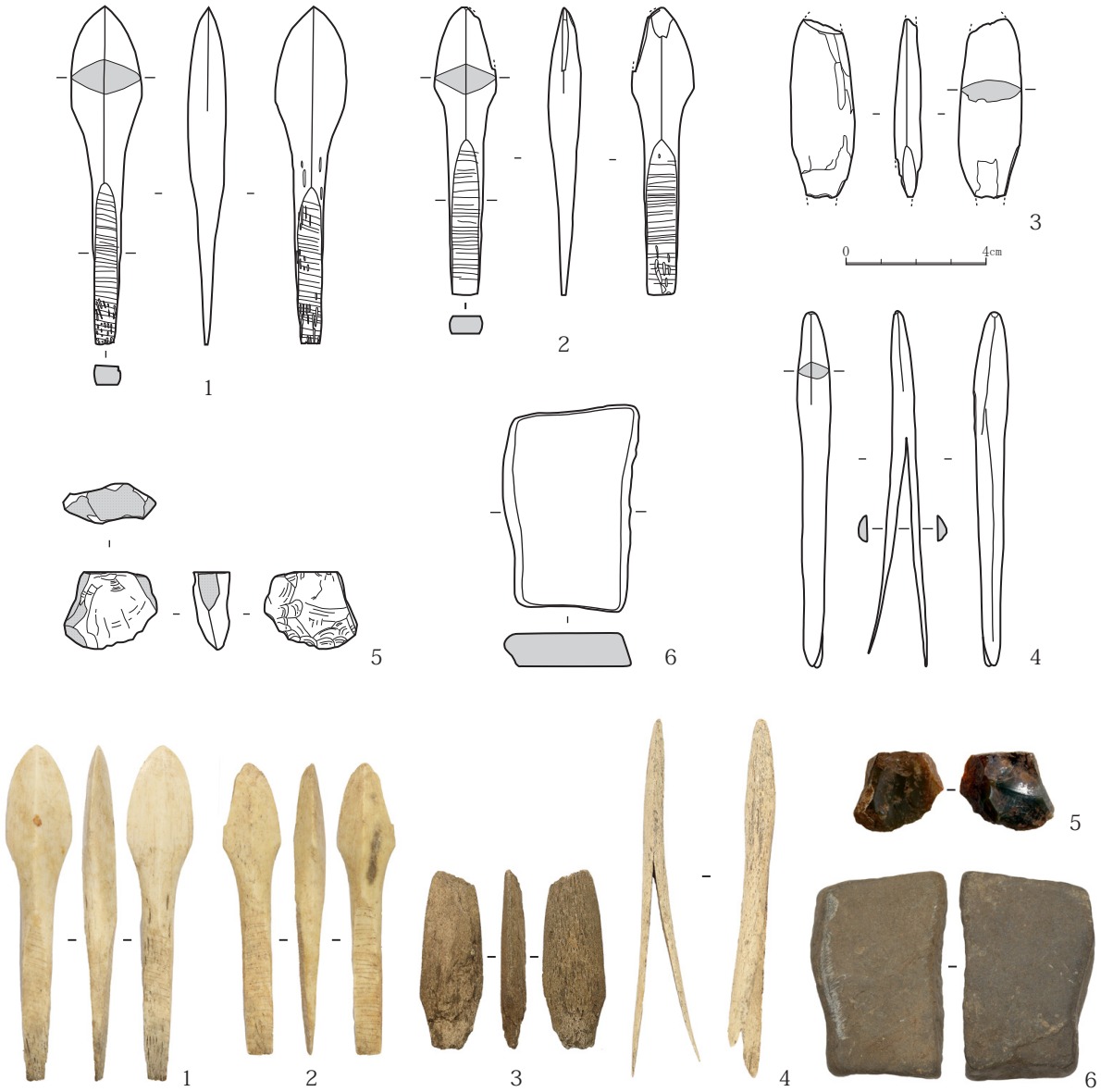


図 24　1 号墓出土遺物（骨製品、石器）

3. 2 号墓の調査

3-1. 調査の過程

2 号墓は第 3 群の最も多くの墓が集まっている尾根末端にあり、地表上で直径約 6m の環状の積石が確認された。墓中央の落ち込みを中心として、東西 6m ×南北 8m の調査区を設定して表土除去を開始したが、東側は積石を全て露出させるために 0.5m 拡張し、最終的に東西 6.5m ×南北 8m の範囲の表土を除去して積石を露出させた（図 25, 28-1）。除草と表土除去のために約 10cm 掘り下げたが、その際に南西部の積石の間から頭蓋骨と思われる骨が出土し（図 25 記載箇所 , 26）、また調査区の南東部で土器片が出土した（図 27）。墓坑の土層断面は A ― A' の面を記録したが（図 30）、環状積石内側の堆積土の厚さは約 20cm あり、この段階では墓壙の落ち込みの輪郭はまだ確認できなかった。積石は保存する方針であったため、ひとまず環状積石の内側を南北ベルトを残して 30cm ほど掘り下げた（図 28-2）。その結果、中央部の陥没と共に落ち込んだとみられる積石と有機物を多く含んだ黒色土が明らかになった。中央の黒色土から順に除去し、落ち込みの積石を外しつつ、掘り下げていった。表土から

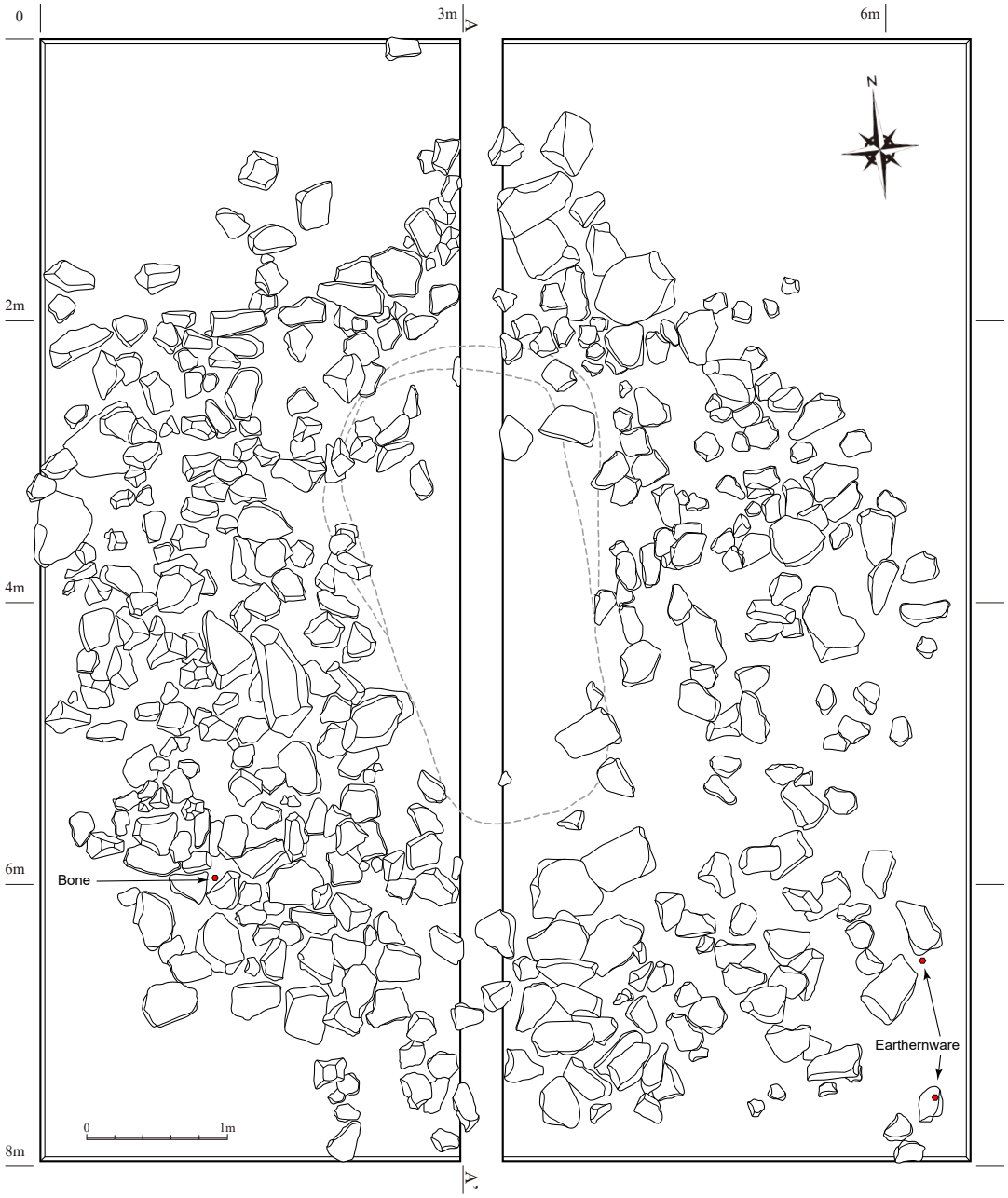


図 25　オラーン・ボラク 2 号墓　表土除去後

約 60cm 下で落ち込んだ積石が少なくなり、中央部の落ち込み埋土の色の違いと輪郭を次第にはっきりと確認できるようになった（図 28-3)。墓壙長辺とみられる直線状のラインが明瞭になってきたことか

図 26　表土除去時に積石間で発見された骨（写真天が北）

図 27　積石と土器出土状況（東南から）

1. 表土除去後

2. 墓壙掘り下げ 1 回目

3. 墓壙掘り下げ 2 回目

4. ベルト除去（深度は 3 と同一）

図 28　オラーン・ボラク 2 号墓　掘り下げ過程

5. 墓壙掘り下げ 3 回目

6. 掘り下げ 3 回目で検出された石とベルトを除去

7. 墓壙半裁、西側掘り下げ（掘り下げ 4 回目）

8. 墓壙掘り下げ 5 回目

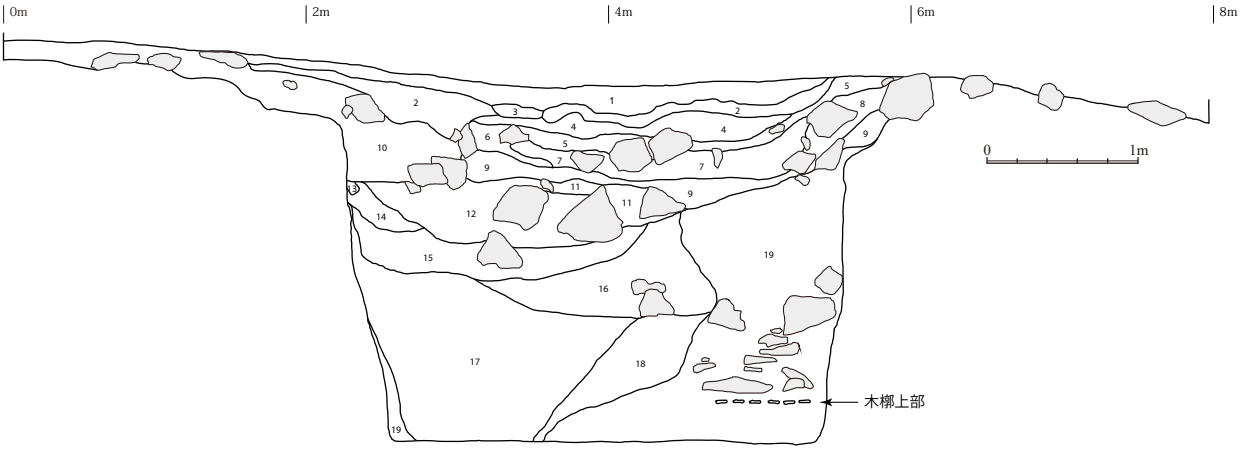
（図 28 つづき）

オラーン・ボラク 2 号墓　掘り下げ過程

9. 木槨（掘り下げ 5 回目後）

ら、南北ベルトを外し、墓壙を平面的に検出した（図 28-4）。石を残しつつ墓壙内側の暗色土を除去して行ったが、乱雑に積み重なっていたことから、これらも陥没に伴って落ち込んだ積石と考えられた（図 28-5）。そのため浮いた積石を除去して再び墓壙内を平面的に確認した（図 28-6）。掘り下げ 3 回目の図 28-6 で見えている石を除去し、約 20cm 掘り下げたところで墓壙の垂直な掘り込みが確実となったため、墓壙を長軸方向に半裁して掘り下げを開始した（図 28-7）。墓壙内では依然として積石に由来するとみられる石が確認され、記録を取りつつ掘り下げを進めた。図 28-8 の掘り下げ 5 回目が、木槨を

図 29　南北ベルト A-A’ 土層断面（図 28-3 段階）（西から）



1. 5YR 1.7/1 黒　表土。礫 3~5% 含む。
2. 5YR 1.7/1 黒　礫 3~5% 含む [6]。
3. 2.5YR 3/1 暗赤灰　礫 1~3% 含む。
4. 5YR 4/1 褐灰　礫 1~3% 含む。
5. 5YR 4/2 灰褐　礫 1~3% 含む。

(6 上層と土色が同一という問題があるが、分層に従った。以下、作図者の記録に問題があり、1,2、2,5、7,8、9,12、18,19 の分層に問題があり、また記載漏れ (11) もある。元データがモンゴル側にあり共有されていないため、標高の記入もできなかった。

6. (3) と同一
7. (4) と同一
8. (4) と同一
9. (5) と同一
10. (5) と同一
11. 未記載
12. (4) と同一
13. (4) と同一
14. 5YR 4/3 にぶい赤褐　礫 1~3% 含む。
15. (2) と (3) の斑土。
16. (4) と (6) の斑土。
17. (2)(4)(6) の斑土。
18. (4) と同一。
19. (4) と同一。

図 30　南北ベルト A-A’ 土層断面

確認する直前にあたり、墓壙内で石を確認できた最後の段階である。墓壙内北側で検出した石の周囲の土はひどく攪乱されており、木質片が多く混じっていた（図 31-1）。したがって、北側より盗掘されていることが予想された。石を除去して掘り下げると、長さ 2.6m、幅 0.6m の木槨が現れた（図 28-9, 31-2）。木槨蓋として短軸方向に渡されていた木材は南部分でのみで確認され、北側では確認できなかった。木槨の北側は 0.4m の所で仕切られ、頭箱（とうしょう）が設けられていた。仕切りの板に接して頭蓋骨や大腿骨など多数の人骨が集まっているのが木槨検出段階から確認できていたが、槨内部を清掃すると、脛骨（けいこつ）や腓骨（ひこつ）、足の骨が原位置と思われる位置で出土した（図 31-3）。足の骨が南側で原位置で出土したこと、匈奴木槨墓で副葬品を納める区画が設けられるのは多くが頭箱（とうしょう）であることから、2 号墓の被葬者は北頭位で葬られていたとみられる。調査の過程で墓壙北側から盗掘を受けていることが確認されていたが、盗掘のためか頭箱からは遺物が出土しなかった。また、人骨が仕切り板に接して集まっていたのも盗掘

1. 墓壙掘り下げ 5 回目（図 28-8 と同一段階）

2. 木槨検出・清掃後

3. 木槨内部・人骨検出状況

図 31　墓壙（写真天が西）

図 32
人骨検出箇所拡大
（➡ は弭と弓弭）

の影響と思われ、原位置であるならば離れた位置で出土するはずの骨製弓付属具 (弭(ゆづか)と弓弭(ゆはず)) も人骨に交じって集まっていた (**図 32**)。被葬者は鑑定の結果、熟年男性 (30 代後半から 40 代前半) であることが明らかとなった。

3-2. 出土遺物

2 号墓からは土器・土製品、鉄器、骨角製品が出土した。ただし、土器についてはいずれも表土除去中に出土し、2 号墓に副葬されていたものかは不明である。その他遺物については、いずれも木槨中より出土した。

■土器・土製品

土器片はいずれも調査区東南部で積石検出中に出土した (図 25 記載箇所)。**図 33-1** は壺か罐(かん)の底部。外面は暗赤褐色だが、内面は煤を吸着して黒色を呈している。底面には回転台の軸痕と考えられている 2.8 × 3cm の方形の凹みがある。残存高 6.8cm、底径 9cm。

図 33-2 は屈曲部のある破片。外面は横方向に良くなでられており、内面は縦方向のハケ目がある。長さ 6.3cm。

図 33-3 は紡錘車と思われる土製の環。木槨内で出土した。直径 3cm、穴径 0.9cm。

■鉄器

鉄器には、刀子、鉄鏃、鎹(かすがい)、環状鉄器があり、それ以外は用途不明である。

図 34-1 は矢の口巻部分と思われる破片。断面を見ると、矢柄(やがら)と思われる直径 0.8cm の木質の中

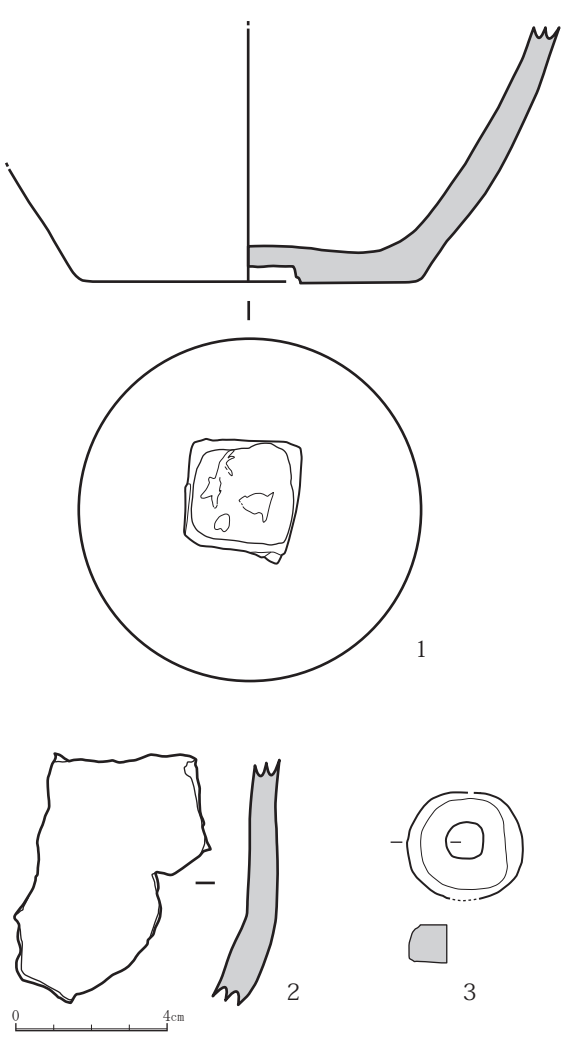


図 33　2 号墓出土遺物
(土器・土製品)

に、鉄鏃茎部と思われる鉄棒が通っている。残存長 4.7cm。

図 34-2 も鉄鏃頸部か茎部と思われる直径 0.5cm の鉄棒。残存長 6.7cm。

図 34-3~6 は鎹（かすがい）かと思われる直角状の屈曲部のある鉄器。出土状況が記録されているのは図 34-6 のみである。いずれも錆膨れしているが、断面を観察できる箇所を見ると、断面は正方形に近い辺と長方形状に薄くなった辺とがある。**図 34-7** も断面長方形の破片である。

図 34-8 は断面円形の鉄棒を C 字形に曲げて作ったと思われる環。直径 3.6cm。

図 34-9 は環の一部で、断面は方形。錆膨れのため詳細は不明であるが、環の一方に薄い方形の鉄板が付着している。

図 34-10 は丸く曲がった環。断面方形の鉄棒は、一方に向かって次第に細くなっている。長さ 3.0cm。

図 34-11~13 はほぼ錆のみの不明鉄器。図 34-11 は鉤状の鉄板から剥がれたかと思われる錆。長さ 3cm。図 34-12 は中空の錆で、長さ 4.9cm。図 34-12 は錆膨れして剥離した側の板状の錆。最大長 5.1cm。

（ 図 34-6　出土状況 ）

図 34　2 号墓出土遺物（鉄器）

図 35-1 は刀子。面取りして稜を残しながら楕円形に削られた角製の柄があり、鉄製の刀子部は柄から 0.7cm の所で折れている。刀子峰部の厚さは 0.4cm。柄の長さは 12.1cm。刀子は木槨内の被葬者右手側で、身体に沿う方向に置かれた形で出土した（図 31）。

■骨角製品

刀子の柄を除くと、骨角製品はいずれも骨鏃と弓付属具である。

骨鏃は 4 点あり、破損のため全体形が不明の 1 点を除くと、いずれも異なる形状をしている。図 35-2 は棒状の鏃で、矢柄に納まる茎部の上下面が末端に行くほど薄く削られているもの。鏃先端部は収束するように菱形 4 面に削り出されている。残存長 6.7cm。

図 35-3 も棒状の鏃であるが、矢柄を挟むことができるように茎部が割られたもの。鏃先端部は収束するように菱形 4 面に削り出されており、鏃身断面は整った円形である。2 つに割れた茎部の間には、幅 0.6cm の薄い鉄片が挟まっていた。全長 10.6cm。

図 35-4 は無茎の三角形の鏃。長さ 4.2cm。

図 35-5 は縦方向に半分に割れたと思われる鏃先端部の破片。残存長 4.3cm。

弓付属具は一式が揃っていると思われる。図 36-7 のみ木槨東壁に沿う位置で出土したが、それ以外は攪乱されて集まった人骨と共に出土した（図

図 35　2 号墓出土遺物（骨角製品 1）

32)。

図 36-1~4 と**図 36-5~7** は、弭(ゆづか)を補強する三日月状の弓付属具である。完形のものはないが、2 点分ある。表面の一部には、細い線が複数刻まれた部分がある。**図 36-8** も弭(ゆづか)を補強する弓付属具で、両端がヘラ状に広がり、片面が削られている。削られた面の中には、細い線が多数確認できる。

図 36-9~13 は弓弭(ゆはず)である。弓の端部側にくる上端は丸みがあり、弦をかけるための刳(く)り込みがある。弓弭の断面はカマボコ形で、弦をかける刳り込みがある側半分には、縦方向の細い線が多数確認される。弓弭は 4 点分あり、2 点は折れているものの完形。図 36-10 は長さ 27.7cm、図 36-13 は長さ 28.1cm。

図 36-14 は用途不明の破片。緩い弧状を呈することから弓弭の端部のようにも見えるが、一方に削っ

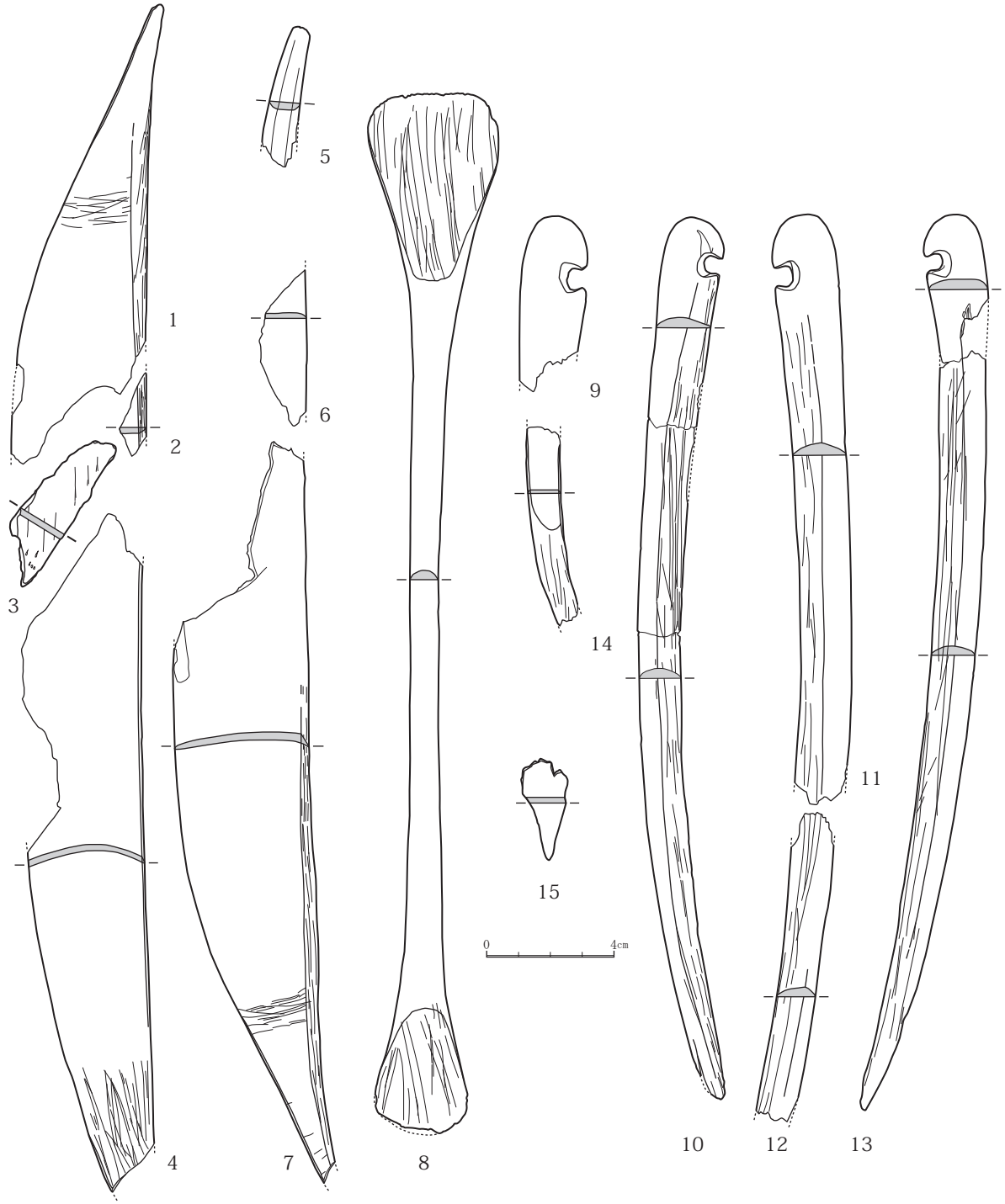


図 36　2 号墓出土遺物（骨角製品 2）

た面があり、削られた面は非常に平滑である。残存長 6.1cm。

図 36-15 は板状の用途不明の破片。上下面共に非常に平滑である。残存長 3.1cm。

（図 36 つづき）　2 号墓出土遺物（骨角製品 2）

4. 3 号墓の調査

4-1. 調査の過程

地表上で直径約 5.5m の環状の積石が地表上に認められたため、東西 6m ×南北 6m の調査区を設定した。除草と表土除去のため、調査区内を約 10cm ほど掘り下げ、環状積石を露出させていった（**図 37, 38-1**）。表土を除去する過程で、調査区の南側で土器片が検出された（**図 37 記載箇所**）。

墓壙の土層断面は A － A' の面で記録したが（**図 39, 40**）、表土除去の段階ではまだ落ち込みの輪郭線は確認できなかった。1 号墓と 2 号墓では環状の積石を残したが、本当に 10cm 程度の表土除去で墓壙の落ち込み輪郭線を検出するのは困難であるのかを確かめるために、3 号墓では積石を除去しながら調査区全体を再び 10cm ほど掘り下げたが、落ち込みの範囲を土の色の違いで平面的に確認することはできなかった。そのため、環状の積石のあった箇所の内側を 20cm 程度掘り下げ、輪郭線を確認した（**図 38-2, 41-1**）。掘り下げ 2 回目の段階で落ち込みの輪郭線が明瞭となってきたためベルトを外し、平面的に墓壙輪郭線を再確認した（**図 38-3, 4;41-2**）。3 回目の掘り下げで、垂直に深くなってゆくことが明確になり、その内側には積石に由来すると思われる石が多数確認された（**図 41-3**）。A － A' を踏襲して

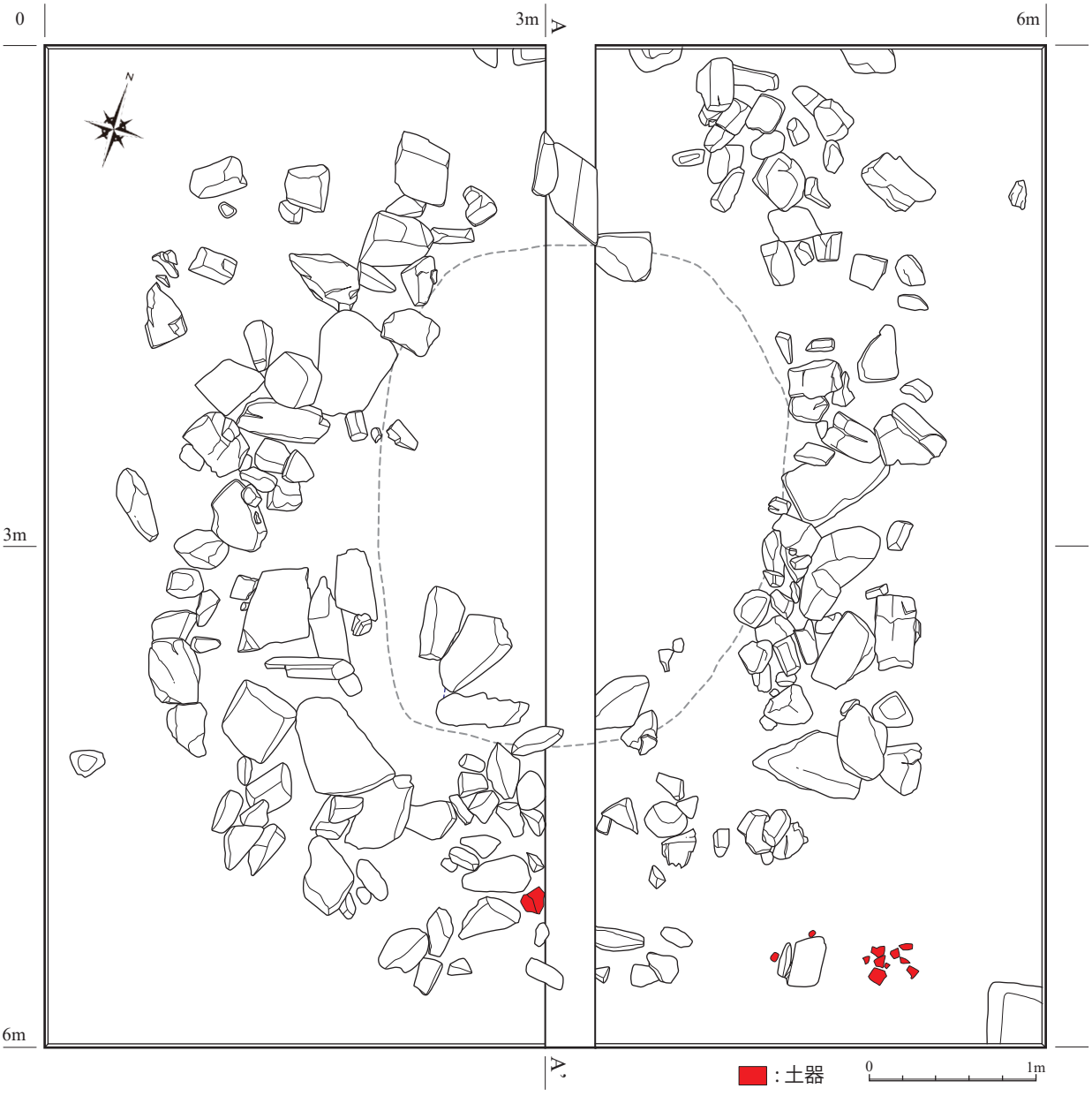


図 37　オラーン・ボラク 3 号墓　表土除去後

1. 表土除去後

2. 積石除去、墓壙掘り下げ 1 回目

3. 墓壙掘り下げ 2 回目

4. ベルト除去、掘り下げ 3 回目

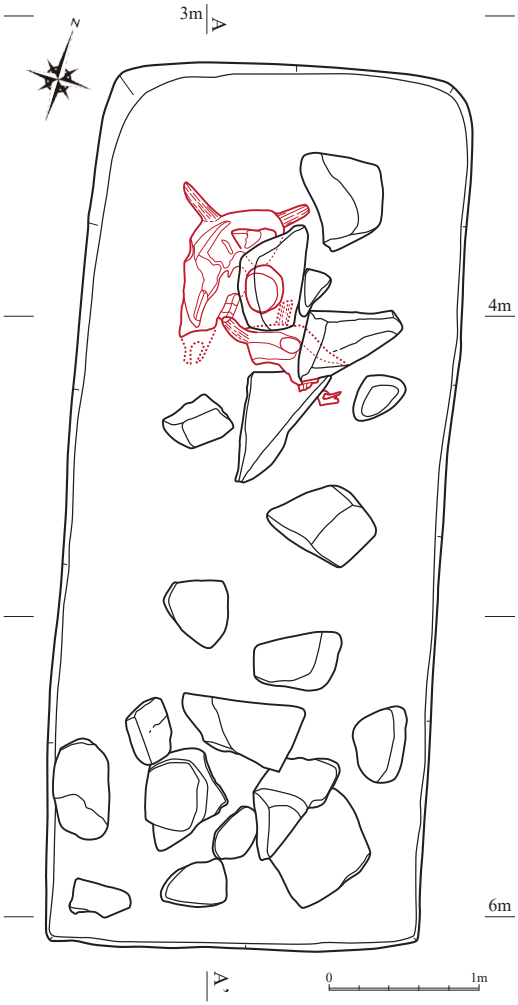
5. 墓壙半裁、西側のみ掘り下げ

6. 東側も掘り下げ（掘り下げ 4 回目）

図 38　オラーン・ボラク 3 号墓　掘り下げ過程

7. 掘り下げ 5 回目

9. 墓壙半裁、掘り下げ（木槨上部検出）

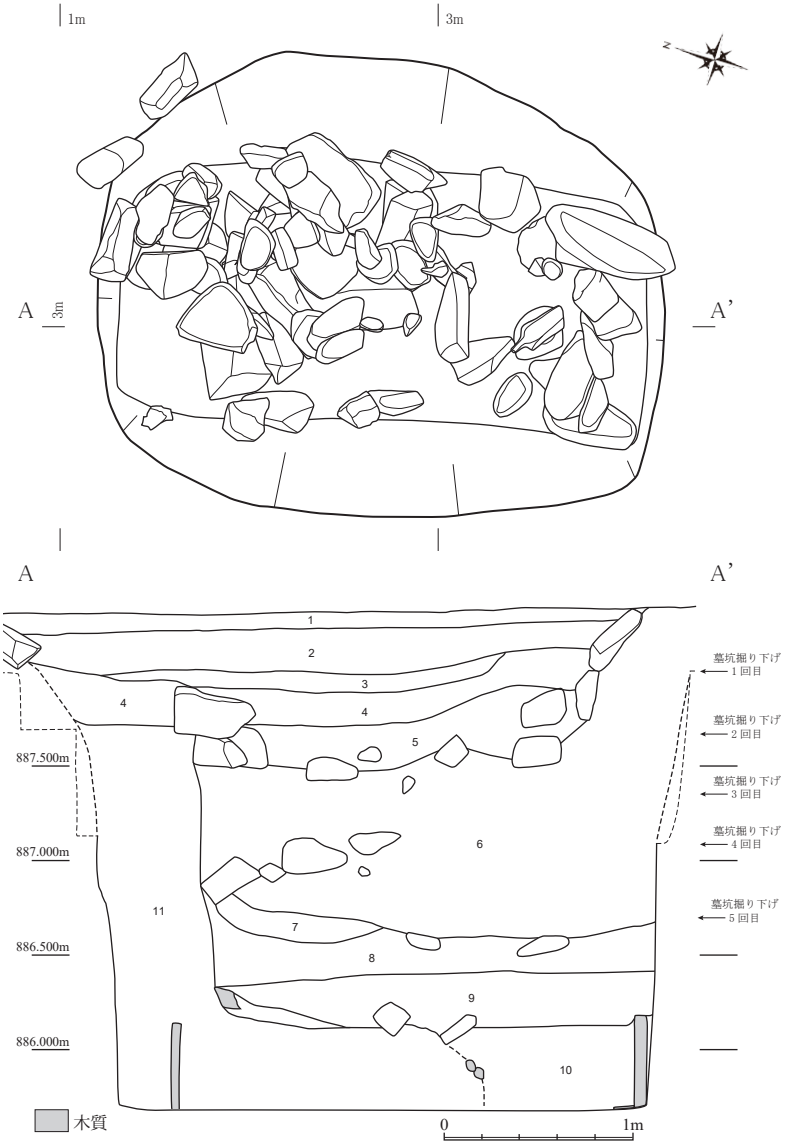


8. 石を除去し、牛頭骨周囲清掃後

（図 38 つづき）

オラーン・ボラク 3 号墓　掘り下げ過程

図 39　南北ベルト A ― A’　土層断面（西から）

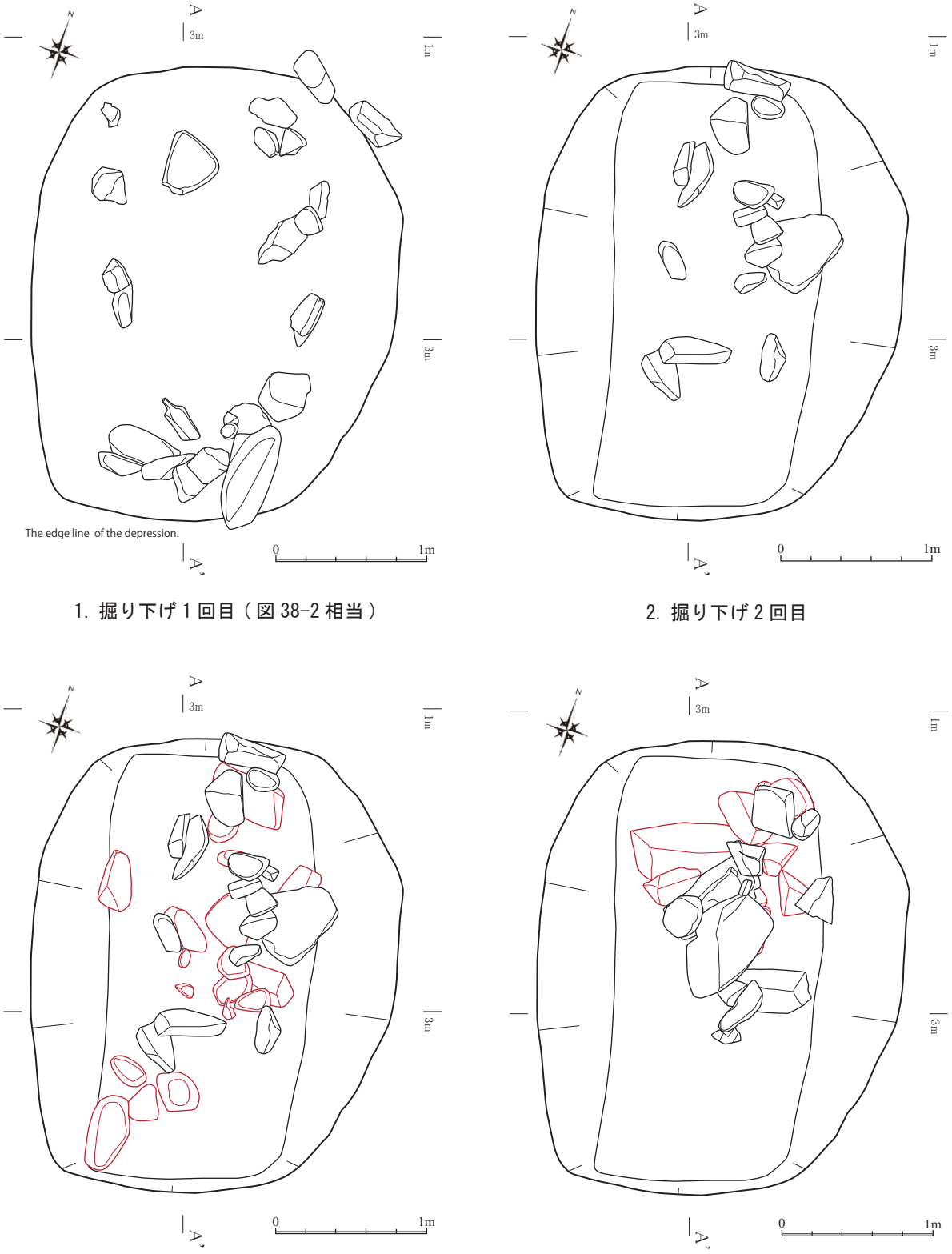


1. 2.5Y 2/1 黒　表土
2. 10YR 4/3 にぶい黄褐　砂質土。
3. 10YR 5/4 にぶい黄褐　黄味が強いが、部分的に炭の多い黒斑がある。砂質土。
4. 10YR 4/2 灰黄褐　1~3mm の礫を 3% 含む。砂質土。
5. 10YR 4/3 にぶい黄褐　砂質土。
6. 10YR 4/2 灰黄褐　斑土。ベースは (4) だが、黒茶色や灰白色の土が斑に入る。3mm 程度の礫を多く含む。
7. 10YR 3/2 黒褐　均質な砂質土。
8. 10YR 4/2 灰黄褐　(5) と同様の斑土だが、斑部分は少ない。
9. 10YR 3/2 黒褐　砂質土。(10) より茶色味が強い。
10. 10YR 4/3 にぶい黄褐　砂質土。均質な土。
11. 2.5YR 4/2 暗灰黄　砂質土。1~3mm の礫を 10% 含む。盗掘坑を埋める土。

図 40　3 号墓墓壙 平・断面図

半裁し、掘り下げていった（図 38-5, 6）。掘り下げ 5 回目の段階で、多数の石と共に角のある牛の頭蓋骨 2 点が確認された（図 38-7,8; 39）。丁寧に置かれたような状況は確認できず、清掃をかけたが頭蓋骨以外の骨も確認されなかったことから骨を取り上げ、さらに掘り下げた。次に石を多く確認したのは、木槨蓋直上でであった（図 38-9）。

木槨蓋の木材は短軸方向に渡されており、木槨四壁に近い部分で最初に確認され始めた。木槨蓋の木材列は南半分では良く残っていたが、北半分は確認



1. 掘り下げ 1 回目（図 38-2 相当）　2. 掘り下げ 2 回目

3. 掘り下げ 2 ～ 3 回目　4. 掘り下げ 3 ～ 4 回目

図 41　3 号墓墓壙　平面図

できる箇所が少なく、北西部分ではほとんど確認できなかった（図 42, 46-1）。北西側では木槨に由来すると思われる板あるいは丸太状の木材が無秩序な方向に落ち込んでいたり、断片化しているのが確認でき、土層断面と合わせて考えて、盗掘坑が達していたものと考えられる。攪乱に伴う落ち込んだ木材に沿って、角製のピンも出土した(7（図 42-3, 5）。木(7 漆塗膜も確認されており、考察編 5 章の岡田論考を

1. 写真天が西

2. 墓壙内から南壁側を撮影

3. 墓壙内から北壁側を撮影

4. 写真天が南壁

5. 攪乱部分での角製ピン出土状況

図 42　木槨上面検出状況

図 43　木槨蓋の木材除去後

図 44　木棺内清掃後

図 45　木棺除去後（棺台の木材 2 本を検出）

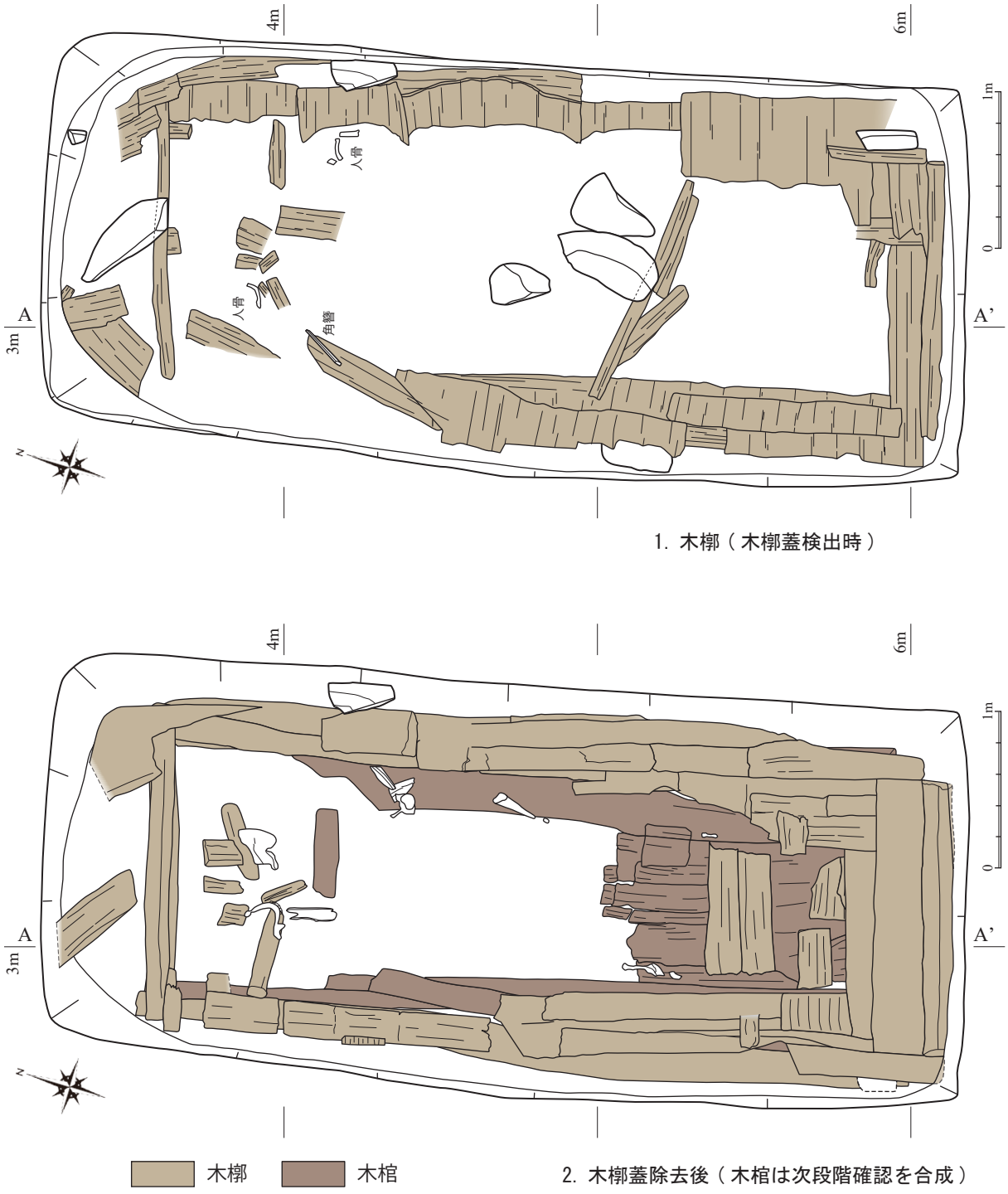
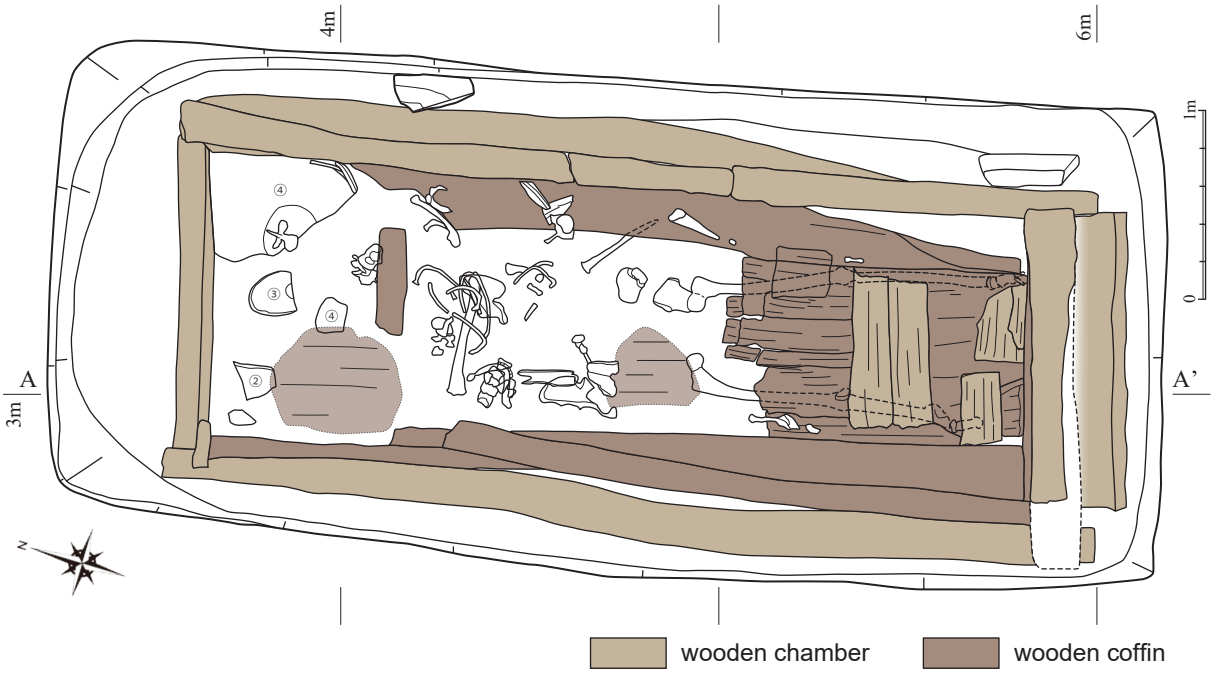


図 46　3 号墓　埋葬施設

槨蓋全面を露出させようと検出をかけたものの、中央が撓(たわ)んだ蓋木材を露出させることはできず、槨の中に木棺が収まった 1 棺 1 槨構造の埋葬施設であることが明らかとなった（図 43, 46-2）。四壁の位置からみて、木槨の大きさは長さ 2.6m ×幅 1.0m。後に木槨除去時に判明するが、木槨南壁の板は 0.83m × 0.49m の 1 枚板で、厚さ 0.6m であった（図 48）。南壁の材は全ての面 (東西両長壁、底、蓋) の板の間に挟まれた構造で、この板材のサイズは木槨内寸と同一とすることができる。

そして、木棺の大きさは長さ 1.7m ×幅 0.47m。木棺についても南壁は 1 枚板であり、その大きさは 0.43m × 0.24m、厚さ 6cm であった。木棺の南



3. 木棺ならびに木槨内出土遺物の検出状況（木槨の材を一部除去）
（図 46 つづき）　3 号墓　埋葬施設

細部（左大腿骨検出時）

図 47　穀物層の検出状況

図 48　木槨南壁（脚側）の一枚板

壁板材も全ての面 (東西両長壁、底、蓋) の板の間に挟まれており、木槨南壁板材に接していたことから、木棺は木槨に南壁を接して安置されていたものと考えられる。**図 43** の木槨内清掃時より木槨北部分では人骨が確認され始めていたが、その後木棺内を清掃してゆくと、北側では人骨が無秩序に集まっている状況が見られた (**図 44**)。ただし、腰以下の骨は原位置を保った状態で検出された。鑑定の結果、被葬者は老年女性 (50 代) であり、北頭位で埋葬されていたと考えられる。特筆すべきこととしては、原位置を保っていた両脚の骨を検出する過程で、厚さ約 1.5cm の穀物層 [8] が全面に広がっているのを確認した (**図 47**)。攪乱されている上半身側でも丁寧に掘り下げを進めたものの、この部分では木棺底面までの発掘で穀物粒は確認できなかった。なお、北半部は盗掘されていたものの、木槨と木棺の長さの差から生まれるスペース (頭箱) では、北東角に接して大型壺が据わった状態で出土した (**図 50**)。木棺除去時 (**図 45**) と木槨除去時 (**図 49**) には、棺槨の下に渡していたと考えられる 2 本の角材が確認できた。棺下の角材の 1 辺 (上辺) は 9cm、槨下の角材の 1 辺 (上辺) は 12cm であった。

木槨を除去して墓壙内を清掃すると、木槨北壁の北で動物骨が確認でき、頭龕が存在することが明らかになった (**図 49**)。頭龕入口部分の北西隅で、頭蓋骨 1 つと肢の骨がまず確認され (**図 51**)、龕内を掘り進めるために見えていたこれらの骨を除去したところ、さらに角のある牛頭蓋骨 1 つと多数の骨が確認された [9] (**図 52**)。最終的に、頭龕の墓壙北壁からの奥行は 0.85m あった。頭龕を含め完掘後 (**図 53**)、調査を終了した。

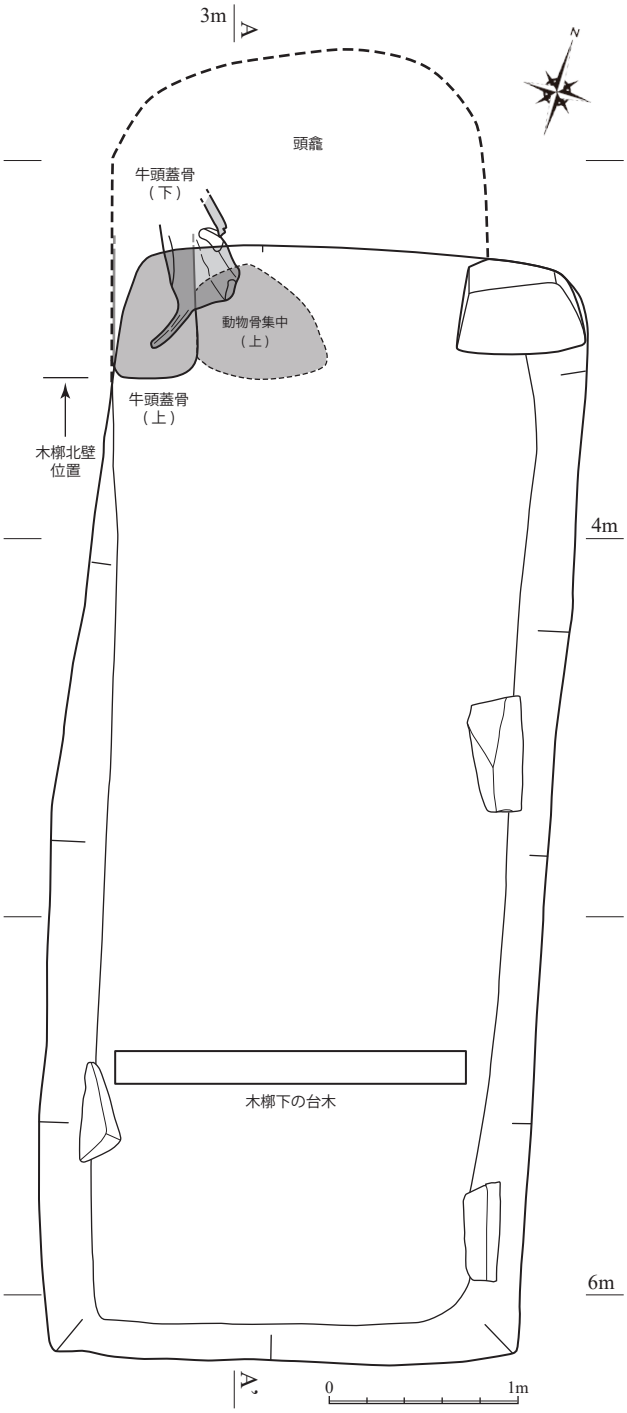


図 49　木槨除去後の墓壙

(8 穀物の鑑定については、考察編 5 章の赤司論考を参照。

(9 動物骨の鑑定については、考察編 3 章のトゥブシンジャルガル報告を参照。その数は頭蓋骨で 4 頭分、下顎骨で 6 頭分と算出され、「牛 1 ～ 6」の番号が振られているが、出土位置との対照が現状で来ていない。取り上げ日時と箇所の情報はプラスチック袋に記載されており、検討されることが望まれる。

4-2. 出土遺物

3 号墓からは土器、骨角製品、石器が出土した。

■土器

土器は図 54 に図化した 4 点が出土した。**図 54-1** は壺頸部で、墓壙掘り下げ 1 回目の墓壙北

側の埋土から出土した。口縁内側に 1 周くぼみが回る。胎土は砂を含み、硬質に焼けている。口径 17cm。**図 54-2** は、攪乱された木槨北西側の頭箱内で出土した 2 片を接合（**図 46-3 ②**）。壺の口縁部で、口縁より下の外面には煤や炭化物が付着している。内面は横方向になでられている。口径 13cm。**図 54-3** も頭箱内で出土した（**図 46-3 ③**）。底部あるいは胴部の破片で、図 54-2 と同じく外面には煤や炭化物が付着し、胎土や色調も似ている。長さ 16.7cm。**図 54-4** は大型壺である。接合された破片の出土日時をたどると、除草後の墓壙掘り下げ時から墓壙北側の埋土を中心に出土しており、最終的に木槨頭箱北東隅に据えられていたことが判明した（**図 46-3 ④**, 50）。底面には、回転台の軸痕と考えられている一辺 1.4cm の正方形のくぼみがある。胴最大径の肩よりやや上の部分に 2 本 1 組の凹線が 2 条回り、その間には 2 本 1 組の水波文が入り、文様帯となっている。文様帯以下は丁寧に縦ミガキが施され、その後、文様帯より 1.6cm 下まで横ミガキが施されている。したがって、この部分の縦みがきは消えている。文様帯より上には、半弧を描くような 3 本単位のミガキと、半弧と半弧の間に刺さるように三角形に集まるミガキの文様線が確認できる。内面は指おさえの痕が多数残る。外面でみて、文様帯下の横方向のミガキがある高さに相当する内面には、右上方向に撫で上げるような指の痕が連続して見られる。底径 17.6cm、残存高 39.4cm。

図 50　頭箱（写真天が北）

図 51　木槨除去後・頭龕入口の獣骨

図 52　頭龕 清掃後

図 53　墓壙内完掘（南から）

■骨角製品

2 点とも棒状の長いピンである。**図 55-1** は、木槨蓋検出時に攪乱部分で出土した (図 42-5)。およそ断面が一辺約 0.7cm の角柱状のピンで、一端はキセル状に作られ、中央に円形の穴が彫られている。長さ 22.8cm。**図 55-2** は断面円形の長いピンで、一方の端には 1 周刻線が巡っている。図 50 に写っている木槨北壁と墓壙北壁の間の土を除去する際に出土した。1 本しかないためピンとしたが、2 本あれば骨箸とも考えられる資料である。長さ 25.4cm。断面径 0.5cm。

■石器

図 55-3 は表土除去時に回収された剥片。長さ 3.1cm、幅 1.7cm。

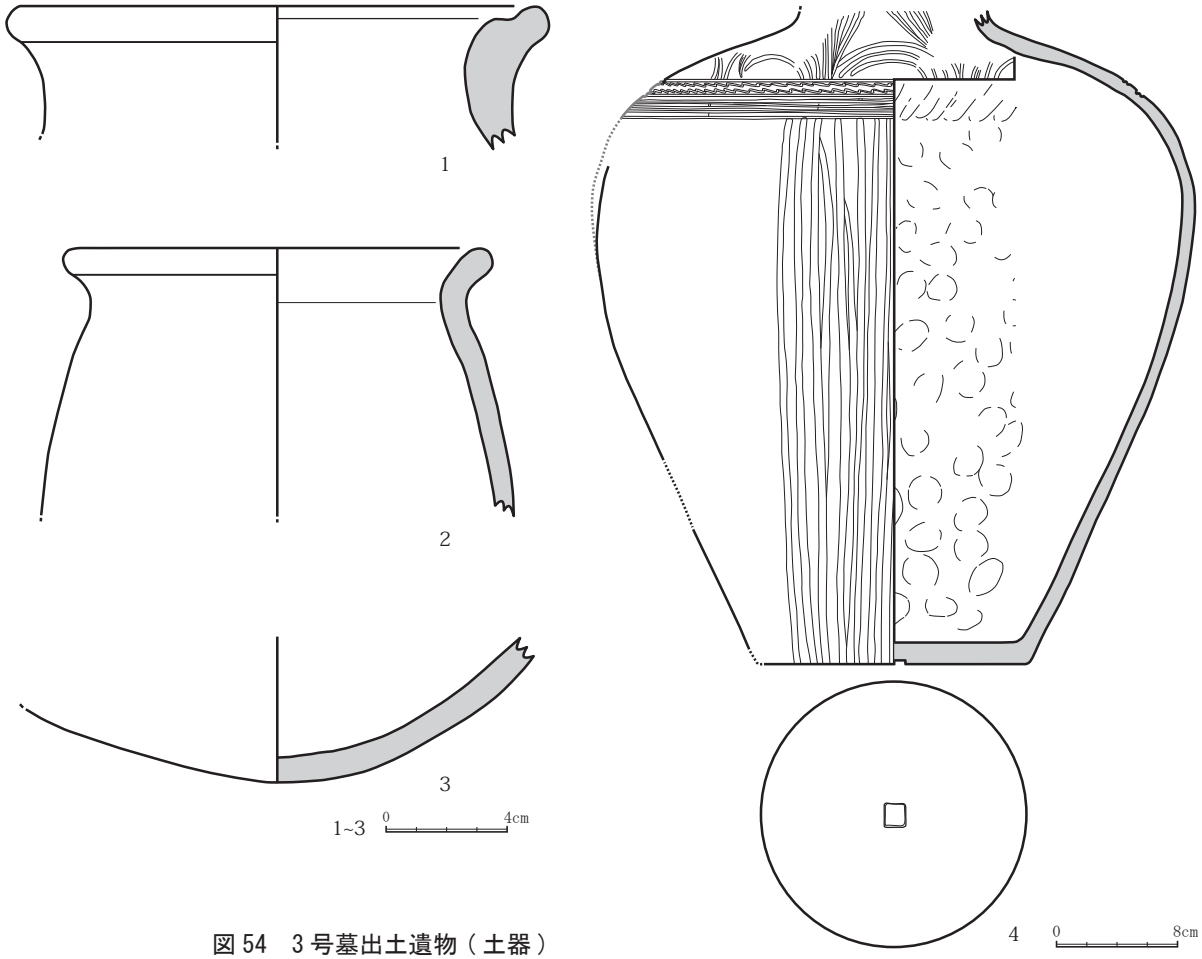


図 54　3 号墓出土遺物 (土器)

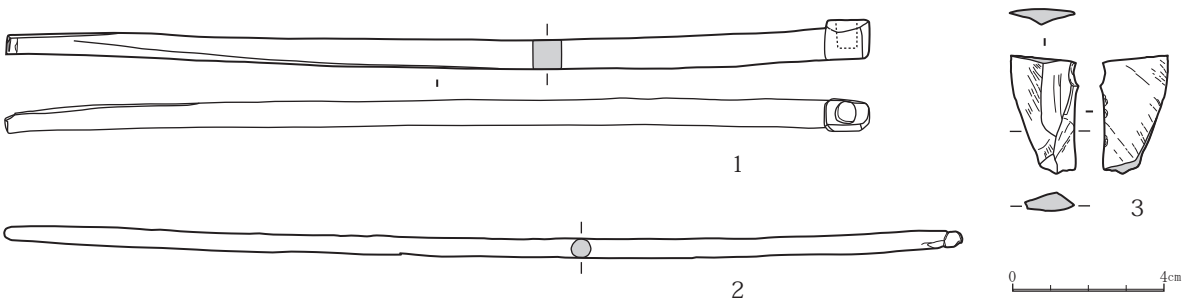


図 55　3 号墓出土遺物 (骨角製品・石器)

図 54　3 号墓出土遺物 (土器)

図 55　3 号墓出土遺物 (骨角製品・石器)

Ⅳ．おわりに

京都大学白眉センターとモンゴル科学アカデミー考古学研究所は、2022 年度の調査として、セレンゲ県ヨロー郡に所在するオラーン・ボラク遺跡で発掘調査を実施した。同墓地には異なる時代の墓が分布しており、匈奴期の墓と考えられる墓は 86 基あり、そのうちの 3 基を発掘調査した。

発掘調査した 3 基の墓は、いずれも環状の積石が地表上で確認でき、その中央地下に竪穴墓壙のある構造の墓であった。これは匈奴期の中・小型墓として一般的なものである。墓の構造は 3 基とも同様であったが、被葬者が安置された埋葬施設の部分の構造はそれぞれ異なっていた。

1 号墓は石棺内に木棺を安置していた (ただ、石棺の短壁側の石は確認できず、上部蓋構造も確認されなかった)。考察編 4 章の人骨鑑定結果から判明するように、被葬者である 10 代後半の若年男性の全身骨格は非常に良く保存されていたが、検出時には乱れた状態で確認された。明確な盗洞が確認できなかったが、墓壙北側に盗洞があった可能性がある。

2 号墓の埋葬施設は頭箱を設けた木槨であり、その中に被葬者は直葬されていたと思われる。墓壙北側に盗洞があり、盗掘されていたものの、被葬者である 30 代後半 ~40 代前半の熟年男性の全身骨格は比較的良く残っており、この墓からは骨角製品と鉄製品が比較的多く出土した。中でも、弓付属具 (弭と弓弭) は弓 1 本分に相当する点数が揃っており、また角柄が装着された状態で鉄製刀子が出土した例はモンゴル国の匈奴期資料として初めての確認例である。

3 号墓の埋葬施設は一棺一槨の二重構造で、木棺と木槨の間に生まれるスペースを頭箱としていた。またこの墓には、墓壙北壁に頭龕が設けられていた。墓壙北側に盗洞があり、北側を中心に盗掘の影響を受けていたが、南側は良く保存されていた。被葬者である 50 代老年女性の人骨は、頭蓋骨を欠くなど発見できなかった部位もやや多いが、下半身の骨は原位置を保っており、ここで穀物層の全面的な広がりを確認確認したことが特筆される。袋や土器に入っていたというよりも、全面に敷き詰めたような状態で出土しており、匈奴期の墓で初めての検出例になるだろう。

3 基の墓から出土した人骨を試料として放射性炭素年代測定を実施しており、その結果、3 基の墓の年代はいずれも紀元後 1 世紀であり、比較的近い年代に集まっている。史書に基づいて、一般的に匈奴期は紀元前 3 世紀末から紀元後 1 世紀とされるが、オラーン・ボラク遺跡はその終わりに近い時期の匈奴墓地であることが分かった。

今回の調査は、モンゴル国中央北部で匈奴期遺跡の発掘調査事例を増やす目的で実施し、穀物の検出など新たな知見を得た。モンゴル国中央北部では、近年 “ 鮮卑期 ” とされる匈奴期より一段階遅い時期の斜坡道をもつ洞室墓が確認され始めており、本遺跡が紀元後 1 世紀の年代を持つのであれば、それら新たに登場する墓制の墓との地域的・年代的な関係性についても今後問題になると思われる。残る 4 ヶ年の調査を通して、考察を深めてゆきたい。

図 56　調査終了時 記念撮影